

都道府県・ 指定都市番号	36	都道府県・ 指定都市名	徳島県	研究課題番号・校種名	2 小学校
				教科名	社会
研究課題	学習指導要領の趣旨を実現するための学習・指導方法及び評価方法の工夫改善に関する実践研究 (ア) 第 3 学年, 第 4 学年の内容 (地域の歴史, 地域の災害) に関わって, 教材開発, 資料作成, 学習展開等を含めた小単元計画を研究する。 (イ) 第 5 学年の内容 (産業の情報化に関わる内容) に関わって, 教材開発, 資料作成, 学習展開等を含めた小単元計画を研究する。				
学校名 (児童数)	鳴門教育大学附属小学校 (592 名)				
所在地 (電話番号)	徳島県徳島市南前川町 1 丁目 1 番地 (088-623-0205)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.elesch.naruto-u.ac.jp/				
研究のキーワード ○現代社会の諸課題 ○認識 ○選択・判断する力 ○市の様子の移り変わり ○県の自然災害					
研究結果のポイント ○ 「市の様子の移り変わり」及び「県の防災」の教材研究の進め方を明らかにするとともに, 単元展開で活用できる教材の資料化を行うことができた。その中で, 「市の発展」や「自然災害への対応」という現代社会に見られる課題に目を向け, 実践を行うことができた。 ○ 「選択・判断」する場面を取り入れ, 社会に対する認識と, 選択・判断する力が相互に作用する学習展開や手立てを事例的に明らかにできた。					

1 研究主題等

(1) 研究主題

現代社会の諸課題に対応した小学校社会科の教材・実践開発
 — 社会に対する認識を深め, 選択・判断する力を育成する授業を通して —

(2) 研究主題設定の理由

本主題で目指すことは, 現代社会の課題に対応した教材・実践を開発し, 社会に対する「認識」と「選択・判断する力」の両面をバランスよく育み, 社会を切りひらく子供を育てることである。

子供たちがこれから生きていく社会は, より一層変化の激しいものであるだろう。少子高齢化・過疎化が進展し地域性が失われていくことが危惧される。また, 東日本大震災や熊本地震などを受けて防災・安全への対応が急務である。さらには, 科学技術が飛躍的に進展する流れの中で, 情報化への対応が必要となってくる。これらの課題を受け, 社会を見る際の視点や方法としての社会的事象の見方・考え方を働かせ, 深く社会の意味や特色などを捉えられる子供を育てたい。そして, 社会的事象を捉えるだけに留まらず学んだことを活用し, 社会の在り方や課題, 今後の方向性などについて対話を通して多角的に考え, 選択・判断できる子供を育てたいと考え, 本主題を設定した。

(3) 研究体制

附属学校部長 校長—教頭—主幹教諭

【各部研究部】
学習指導研究部
 学習環境研究部
 教育成果刊行部
 教育実習研究部
 生活指導研究部
 人権教育研究部

○**学習指導研究部**
 ・カリキュラム研究
 ・教育方法研究 (研究主題)
 ・教育方法研究 (授業研究)
 ・教育評価研究
 ・学習指導ホームページ研究
 ・教育情報研究

【各教科・領域部】
 社会

鳴門教育大学共同研究者

(4) 1年目の主な取組

平成 29 年度	4月	・アンケート等による子供の実態把握・分析 ・研究計画の立案
	5～7月	・大学機関と連携しての理論研究 ・第3,4学年における教材研究・単元開発 ・第5学年における教材研究
	10月	・第3,4学年における研究推進授業の実施 (講師：文部科学省初等中等教育局視学官 澤井 陽介 氏)
	11月～1月	・研究授業の分析と修正案の作成
	2月	・中間発表, 研究協議：理論, 実践についての考察, 次年度の取組について

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

- ①現代社会の諸課題に対応した内容を扱う単元開発
 - ア, 第3学年における「市の様子の移り変わり」の単元開発及び実践
 - イ, 第4学年における「県の自然災害」の単元開発及び実践
 - ウ, 第5学年における「産業の情報化」の単元開発及び実践 (平成30年度予定)
- ②社会に対する認識の深まりと, 選択・判断する力の高まりを目指す場面設定と手立て
 - ア, 子供の「認識」と「判断」が相互に作用する授業場面の設定
 - イ, 社会に対する認識を深め, 選択・判断する力を高める具体的手立て
- ③学びや変容を自覚できる自己評価と, 教師の見取りの方略
 - ア, 授業展開中における自他の考えの可視化
 - イ, 社会に対する認識と, 選択・判断する力の評価の工夫

(2) 具体的な研究活動

①現代社会の諸課題に対応した内容を扱う単元開発

本年度は, 次期学習指導要領において示された第3学年「市の様子の移り変わり」と第4学年「県の自然災害」についての単元開発及び実践化に取り組んだ。

ア, 第3学年における「市の様子の移り変わり」の単元開発及び実践

第3学年単元「調べよう 徳島市の昔と今」

「人口」「交通」「土地利用」「公共施設」「生活の道具」などを観点として, 徳島市の様子や生活の移り変わりを学んでいくことができるように単元設計を行った。単元開発に当たっては, まず市役所の企画政策課の方から教材研究として話をうかがった。その方を中心に, 市の公民館・地域の古老・市交通局等へつないでいただき, 文献資料・統計資料も紹介していただいた。合わせて, 市立図書館や子育て安心ステーション, 県立博物館等の公共施設へも取材を行うと同時に, 過去の副読本や写真集資料等から教材研究を行った。教材研究の成果を単元の構造図に整理し, 単元展開を計画していった。

イ, 第4学年における「県の防災」の単元開発及び実践

第4学年単元「防災ブックをつくろう ―地震災害から人々を守るために―」

県や市がこれまでに起こった地震災害に対処してきたことや, これから起こりうる地震災害に備えて, 様々な取組を行っていることを理解することができるように単元計画をした。単元の開発にあたり, 県のとくしまゼロ作戦課, 県立防災センター, 地域の自主防災組織の会長からお話を聞かせていただいた。過去の災害については, 文献資料・統計資料を基に教材研究を行った。子供たちへは, 提示する資料を精選し, 友だちと対話的に学ぶ中で, 地域社会の一員として自分たちにできることは何かを考え, 自分たちの立場を踏まえて現実的な協力を選択・判断できるような場面を設定することとした。

②社会に対する認識の深まりと、選択・判断する力の高まりを目指す場面設定と手立て ア、子供の「認識」と「判断」が相互に作用する授業場面の設定

「市の様子の移り変わり」の実践においては、単元の学習を生かして、市の暮らしやすさについて焦点化して話し合う2つの場面を、単元終盤に設定した。まず、ゲストティーチャーである市役所の方の言葉をきっかけに「徳島市が暮らしやすい市になっているかどうか」を立ち止まって考える場面（本時①）を設定し、市の特長と課題を見出した。そして、本時①で話し合ったことを基に、徳島市という地域社会に見られる課題をふまえて今後の徳島市の発展を考える場面（本時②）を取り入れた。話し合いを通して子供たちは、市の特長とともに、「子育て」「市バス」「お店の数」「田畑の数」「自然環境」等に市の課題が見られることを認識し、その深まった認識を根拠に選択・判断する姿が見られた。そして、選択・判断したことを友達と伝え合っていく中で、徳島市の特長や課題を、更に深く認識するようになっていった。

「県の防災」の実践においては、県の防災への取組の中心となっている「とくしまゼロ作戦課」の「死者ゼロ」を目ざした取組のうち、優先すべきことは何かを一度立ち止まって考える場面として設定した。これまでに調べて学習してしたことを根拠にして、自助・共助・公助の取組から、優先すべき具体的な取組を挙げ、話し合った。優先すべき理由はこれまでの学習を生かしたものとなり、自助が共助や公助に持つつながるなど「事象や人々の相互関係」という社会的事象の見方・考え方を働かせて認識することに持つつながった。その深まった認識を根拠に「今の自分たちにできることは何か」を考える子供の発言を取り上げ、選択・判断する場面を設定した。選択・判断の場面は、友達と伝え合う中で、徳島県の地震災害への取組の課題ふまえ、自分にできることを伝え合う中で、更に深く認識することへとつながったと考える。

イ、社会に対する認識を深め、選択・判断する力を高める具体的手立て

社会に対する認識を深め、選択・判断する力を高める手立てとして、ここでは、「見方・考え方が働く資料提示」「焦点化する問いかけ」「社会の仕組みや関係が見える板書」の三つを示す。

「市の様子の移り変わり」の実践においては、時間の経過に着目した社会的事象の見方・考え方が働くように、子供たちとともに作成した市の絵年表や、子供向けに加工した市の統計資料（高齢者の数の推移、商店の数の推移等）を掲示し、活用できるようにした。本時①の話し合いを「市の特長」と「市の課題」に板書上で整理した。市の特長と課題が見えてきたところで、本時②につなぐために「さらに暮らしやすい市にするにはどうすればよいのか」を問いかけた。子供たちの思考が過去・現在から未来へと向かう問いかけである。本時②で、市の発展を考える際には、担当の方からうかがった市役所の具体的な取組をモデルとして示し、「『特に大事』と考える取組は何だと思うか」を問いかけた。その際、本時①で見出した「市に見られる課題」を意識できるように、黒板左側に板書した上で、話し合いを展開した。

「県の防災」の実践においては、現在の取組については実地調査・体験を取り入れた。過去の地震災害への対処については、徳島県の地震年表を作成するようになり、被害状況や被害を受けた方へのインタビューの回答の統計資料を用意し、そこから読み取ることができるようになりした。授業展開の終盤で、「今の10歳の自分にもできることは何か」と問いかけた。そうすることで、自分にできることは当然「自助」の取組ではあるが、その取組が、共助の取組や公助の取組につながることを深く認識することへとつながったと考える。また、板書には、子供たちの意見を自助・共助・公助の観点で色分けして書き分けた。そして、それぞれがつながっていることを確認できるように、子供の発言に合わせてそれぞれの相互関係を表すことができるよう矢印などで表した。

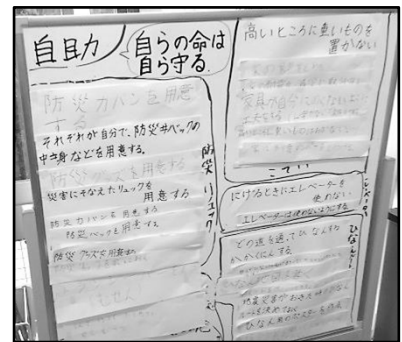


③学びや変容を自覚できる自己評価と、教師の見取りの方略

ア、授業展開中における自他の考えの可視化

授業展開中における自他の考えの可視化のために、ネームカードや短冊カードを活用した。

「市の様子の移り変わり」の実践では、自分が選択・判断したことをネームカードで表すことにより、自分の考えの立ち位置を自覚するとともに、友達の考えの立ち位置や分布を可視化できるようにした。「県の防災」の実践においては、前時に作成したこれまでに調べた地震災害への取組を短冊カードに書き、教室の周りに置いたボードに掲示することで、子供たちが自由に見ることができるようにし、前時にまとめた取組の中からでも、優先すべきことを選択できるようにした。



イ、社会に対する認識と、選択・判断する力の評価の工夫

社会に対する認識と、選択・判断する力の評価の工夫として、事前アンケートや見取り表を活用した。「市の様子の移り変わり」の実践では、単元前に「今後どのような徳島市になってほしいか」という設問を意図的に入れた事前アンケートを行い、単元後の考えとの比較を試みた。また、単元展開中においては日々の振り返りを見取り表に記録し、その変容を分析することとした。特に、「昔と比べて今の徳島市はどのような市と言えるか」を話し合う場面や、研究内容②の徳島市の暮らしやすさに焦点化して話し合う場面等については、子供の認識と、選択・判断が直接表れる場面であると捉えて、抽出見を設定し分析を行った。

「県の防災」の実践においては、単元前に「大きな災害と聞いてどんなことを思い浮かべますか」と問い、単元の終末にその問いに対する回答を振り返った。子供たちは、単元を通して学んだことについて考え、自分たちの社会的な見方・考え方の成長を実感していた。また、毎時間の学習の振り返りを見取り表にし、全体の傾向と一人一人の変容を見取ることができるようにした。どちらも、その後の単元展開に生かし、一度立ち止まって考える場面の設定に生かした。

3 研究の成果と課題（○成果●課題）

- 次期学習指導要領に示された「市の様子の移り変わり」及び「県の防災」の教材研究の進め方を明らかにするとともに、単元展開で活用できる教材の資料化を行うことができた。その中で、「市の発展」や「自然災害への対応」という現代社会の課題に目を向け、実践を行うことができた。
- 次期学習指導要領に示された「選択・判断」する場面を取り入れ、社会に対する認識と、選択・判断する力が相互に作用する学習展開や手立てを事例的に明らかにできた。
- 日々の振り返りを見取り表に記録することにより、考えの変容の傾向を捉えることができた。特に、「選択・判断する力」「よりよい社会のイメージ」の分析方法を、事例的に示すことができた。
- 多様な観点が幅広く記述された振り返りから、認識と選択・判断する力の高まりの評価を行うことは困難であった。今後、単元の特定の場面において、書き出しを限定して記述する場面を設定するなど、評価・分析の方策を研究していく必要がある。また、1時間の授業の変容を見取るだけでなく、複数単元や年間など長いスパンで見取ることを考える必要もある。
- 「認識」「判断」などのキーワードについて、どのような意味をもつものかを「見方・考え方」「資質・能力」「問い」などとの関係から明確にし、整理して示す必要がある。

4 今後の取組

次年度においては、研究内容①ウで示した第5学年における「産業の情報化」の単元開発及び実践に取り組むと同時に、本年度開発した第3、4学年の実践に改善を加え、現代課題の諸課題に対応した教材・実践開発を進める。そして、社会に対する認識と、選択・判断する力の両面をバランスよく育むための学習問題や学習展開について研究を深めるとともに、その評価・分析の具体策を明らかにしていきたい。